

授業づくり FIRST STEP ―中学校道徳科―

1 授業構想は何のため？

- 学習指導要領では、新しい時代に必要な資質・能力を育成するために、「主体的・対話的で深い学び」を実現することが大切だと示されています。
- 道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を行うことが、道徳科における「主体的・対話的で深い学び」及び「考え、議論する道徳」ということにつながります。
- 授業を構想することで、生徒が「問題意識をもって授業に臨む」「自分との関わりで考える」「多面的・多角的に考える」「自分自身を振り返る」「人間としての生き方についての考えを深める」ことができる学習活動を行うことができます。



2 授業構想の手順と各段階のポイント

授業構想の手順に沿って、各段階のポイントを押さえているか□に✓を付けて確認しましょう。

(1)年間指導計画を確認します。

- ①年間指導計画を基に、授業で扱う教材と指導する内容項目を確認する。
- ②指導する内容項目に対する生徒の実態を把握する。

年間指導計画とは

全ての内容項目に基づいた指導を行いながら、生徒の実態に応じた道徳科の授業を行うための大切な指導計画です。道徳教育の全体計画に基づき、道徳科において指導しようとする内容について、生徒や学校の実態に応じて各学校で作成されます。この計画に則って授業を行うことで、全ての内容項目について漏れなく指導ができます。

内容項目とは

生徒が人間として他者と共によりよく生きていく上で学ぶことが必要と考えられる道徳的価値を含む内容を、短い文章で平易に表現したものです。目標を達成するために指導すべき内容項目をA～Dの4つの視点に分けて示しています。

A	主として自分自身に関すること
B	主として人との関わりに関すること
C	主として集団や社会との関わりに関すること
D	主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

(2)指導の意図を明らかにします。

- ①教材、内容項目、生徒の実態を踏まえて授業のねらいを検討し、指導の意図を明らかにする。
- ②明らかになった指導の意図が最も端的に表された主題名になっているかを吟味する。
- ③道徳的価値の理解を踏まえて教材を吟味する。

「ねらい」とは

道徳科の内容項目を基に、ねらいとする道徳的価値や道徳性の様相を端的に表したものです。

「主題」とは

指導を行うに当たって、何をねらいとし、どのように教材を活用するかを構想する指導のまとまりを示したものが主題です。授業者の思いを込めて端的な言葉で主題名として表すことで、指導の意図が伝わるようになります。

Break Time 1 ―「道徳教育」と「道徳科」について―

学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育、そして、その要となる道徳科ではどちらも「よりよく生きるための道徳性を養う」ことを目標にしています。道徳教育の要となる道徳科では、道徳性を構成する諸様相を育みます。道徳性の諸様相は、行為として現れる部分ではなく、目には見えない「内面的資質」です。この「内面的資質」を道徳科の授業で育むことによって、道徳的実践、つまり目に見える具体的な行為につながります。そして、道徳的実践が繰り返されることにより、内面的資質も高められていきます。このように、「道徳教育」と「道徳科」が相互に響き合って道徳性が高まっていきます。

【浅見哲也著「こだわりの道徳授業レシピ」を基に作成】



2. 指導方法

(1)授業のねらいを達成するために、生徒の実態と教材の特質を押さえた発問を考えます。

- ①授業のねらいに深く関わる、**中心的な発問**を考える。
- ②中心的な発問を生かすための**前後の発問**を考える。

(2)(1)を踏まえ、学習活動をより効果的に行うことができる指導方法を考えます。

- 生徒が広い視野から多面的・多角的に考えることができる手立てや、授業のねらいとする道徳的価値を自分のこととして捉えることができる手立てを考える。
- 生徒相互の考えを深める中心的な学習活動である**話し合い**を取り入れる。
- 授業のねらいとする道徳的価値について、自分自身を振り返り、自らの価値観を見つめ、見直し、考えを深めたり、整理したりできるように**書く活動**を取り入れる。

※この他、以下のような工夫も考えられます。

教材を提示する工夫	表現活動の工夫	情報機器の活用
○教師が全文を丁寧に読み聞かせる ○意図的に分割して提示する ○教材のあらすじを紹介する程度で読み聞かせはしない ○事前に生徒に教材を読ませておく ○電子黒板に提示する ○紙芝居やイラストで提示するなど	○特定の役割を与えて即興的に演技する役割演技の工夫 ○動きやせりふのまねをして理解を深める動作化の工夫 ○音楽、所作、その場に合った身のこなし、表情などで自分の考えを表現する工夫など	○実態や問題を画像や映像、グラフ等にして示す ○自分の考えを1人1台端末に示す ○1人1台端末に示したそれぞれの考えを電子黒板に示して共有する ○1人1台端末に自分の思いを蓄積するなど

上記に加えて、板書を生かす工夫や説話の工夫も考えられます。導入や終末場面でも指導方法の工夫は必要です。

⇒「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編」(以下、学習指導要領解説) pp.83-85

指導方法の工夫そのものが授業の目的にならないように留意しましょう。



(3)導入と終末で行う学習活動を考えます。

- 導入において、生徒に本時の主題に関わる問題意識や、教材の内容に興味や関心をもたせることができる学習活動を考える。
- 終末において、生徒が学習を通して考えたことや新たに分かったことを確かめたり、学んだことを更に深く心にとどめたり、これからへの思いや課題について考えたりすることができる学習活動を考える。

3. 時間配分

●時間配分を決めます。

- 生徒が自ら考え理解し、主体的に学習に取り組むことができるように、「中心的な発問」について考える時間を十分に確保する。
- 生徒が自己を見つめ直し、人間としての生き方について考えを深める時間を十分に確保する。

- 授業構想における大切なポイントは、生徒に「何を考えさせたいか」「何に気付かせたいか」ということです。
- 授業構想の具体(例)を次に示します。



1. 授業のねらい

(1)年間指導計画を確認します。

①年間指導計画を見て、授業で扱う教材と指導する**内容項目を確認**する。

【具体例】教 材 名 「あるレジ打ちの女性」(出典:木下晴弘著「涙の数だけ大きくなれる!」フォレスト出版)一部改作
内容項目 C-(13) 勤労

主人公の女性は、何をしても続かず、何度も転職を重ねていた。ある日、派遣先からレジ打ちの仕事を紹介されたが、この仕事も辞めたくなり、そんな自分が嫌になった。仕事を辞めて田舎に帰ろうとしたとき、小学校の頃に書いた日記を見付け、ピアノだけは唯一続けられたことを思い出す。スーパーのレジを、ピアノを弾くように打ち始めたことで仕事が楽しくなっていく。店内が込み合うある日、自分のレジを求めて多くのお客さんが並んでいる光景を見た女性は、感激で思わず涙があふれた。そして、働く喜びや充実感、成就感を実感していく。



②指導する内容項目に対する**生徒の実態を把握**する。

内容項目の概要には、「勤労とは、自分の務めとして心身を労して働くこと」と書いてあるけど、生徒は働くことや職業についてどのように考えているのかな。



アンケートの結果を見ると、働くことの意義は見いだしているようだ。ただ、自分の個性を生かした職に就くことで得られる成就感や充実感まで考えが及んでいないようだ。

(2)指導の意図を明らかにします。

①教材、内容項目、生徒の実態を踏まえて授業のねらいを検討し、**指導の意図を明らかに**する。

主人公の女性が、自分の能力や個性を生かせる仕事であるということに気付く、働く喜びを得る教材だな。生徒には、勤労を通して、充実した生き方を追求していくことに気付いてほしいな。



生徒には、自分の能力や個性を生かした職業について考えを深めてほしいな。その上で、勤労を通して、充実した生き方を追求し、生きがいのある人生を実現しようとする意欲を高めてほしいな。

②明らかになった指導の意図が最も端的に表された**主題名**になっているかを吟味する。⇒[学習指導要領解説 p.74](#)

年間指導計画の主題名は「勤労の意義」と記載されているけれど、生徒の実態と少し合わないようだ。



「仕事を続けるすばらしさ」について考えを深めることで**道徳的価値の理解**が深まるかもしれない。生徒の実態に合った主題にしたいから、変更可能かどうか*道徳教育推進教師や学年の先生に相談しよう。

*) 変更することによって一層効果が期待できるという判断を前提として話し合った上で、校長の了解を得て変更することが必要です。

「道徳的価値の理解」とは

道徳性を養うためには、道徳的価値について理解を深める学習を欠くことはできません。道徳的価値の理解には次の3つの理解があります。

価値理解	内容項目を、人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解すること
人間理解	道徳的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなども理解すること
他者理解	道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方は一つではない、多様であるということを前提として理解すること

この3つの理解を他人事ではなく、自分の経験やそのときの感じ方、考え方と照らし合わせながら考えを深めていきます。そうすることで、自己理解につながっていきます。

【小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 特別の教科 道徳編を基に作成】

③道徳的価値の理解を踏まえて**教材を吟味**する。

「教材の吟味」とは

指導の意図、生徒の実態を基に、教材をどのように活用し、どのような学習を行うのかを明らかにすることです。
ねらいとする道徳的価値について、教材のよさを生かし、生徒の実態を踏まえながら「価値理解」「人間理解」「他者理解」ができるような場面を見付け、「自己理解」につながるように教材を吟味します。

2. 指導方法

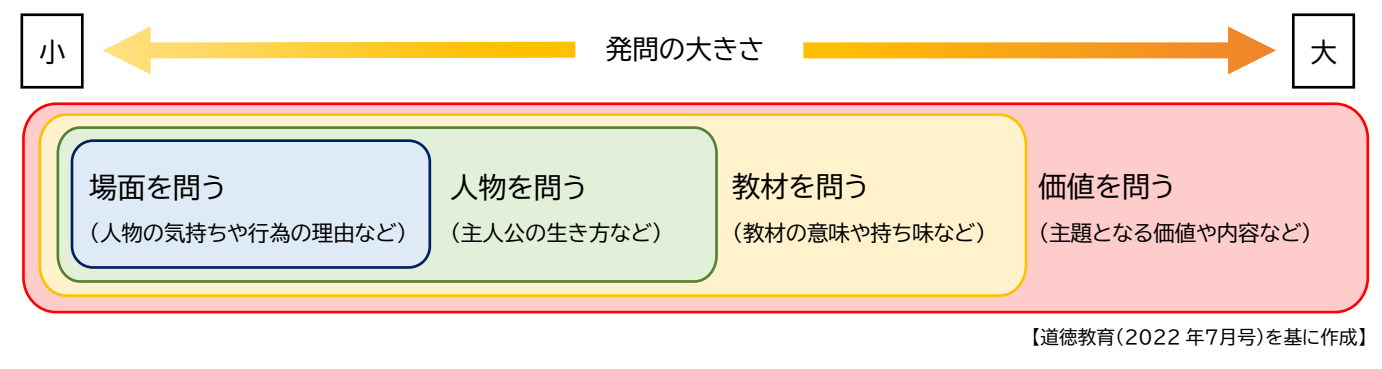
(1)授業のねらいを達成するために、**生徒の実態と教材の特質を押さえた発問**を考えます。

①授業のねらいに深く関わる、**中心的な発問**を考える。

「中心的な発問」とは

主題や授業のねらいに深く関わる発問のことです。より深く道徳的価値について理解することができるように、生徒が広い視野から多面的・多角的に考えることができる発問にします。

【発問の対象・大きさと発問例】



②中心的な発問を生かすための**前後の発問**を考える。

「中心的な発問の前後の発問」とは

中心的な発問を生かすための発問のことです。
必ず前と後ろで発問を設定するというのではなく、中心的な発問を生かすために設定します。

中心的な発問(例)

仕事を続けるために大切なことはどのようなことだろう。

中心的な発問の前後の発問(例)

- ①レジを打つ仕事に就いて1週間経ったとき、女性はどのような気持ちだったのだろう。
- ②(「仕事を辞めて帰っておいで」と言った母に)「もう少しここで頑張る」と言ったとき、女性はどのような気持ちだったのだろう。
- ③なぜ、自分のレジを求めて多くのお客さんが並ぶ光景を見て涙が止まらなかったのだろう。

生かす

授業のねらいに迫る段階において、生徒が道徳的価値について考えを深めるために、教材の内容で前提として押さえておきたいことを確認しておきましょう。
(例) 登場人物の人間関係、教材の時代背景、教材の中の語彙等の説明など



(2)(1)を踏まえ、学習活動をより効果的に行うことができる指導方法を考えます。

「話し合い」について

話し合いは、道徳科の授業において重要な役割を果たす学習活動です。生徒が自分の考えをもち、他者と話し合うことで、目には見えない内面的資質が見えてきます。そのため、考えを出し合う、まとめる、比較するなどの目的に応じて効果的に話し合いが行われるように工夫します。座席の配置を工夫したり、討論形式で進めたり、ペアでの対話やグループによる話し合いを取り入れたりするなどの工夫も考えられます。

話し合いは、発問から始まります。そこで、生徒が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりすることができるような発問の工夫が必要です。

目的に応じた効果的な話し合いの発問(例)

- 自分の考えを広げたり深めたりするために、友達と考えを出し合おう。
- 自分の考えと比較するために、異なる意見の人や似ている意見の人とじっくり対話をしよう。

生徒の多様な感じ方や考え方を引き出すことのできる学級の雰囲気をつくり、互いに気持ちや考えを伝え合うことは「対話的な学び」につながります。そのため、生徒が安心して意見を述べ、互いに学べるような学級の雰囲気づくりが大切です。

また、道徳科の授業開きで、生徒とともに道徳科の授業の学び方を確認しておきましょう。



「書く活動」について

書く活動は、生徒が自ら考えを深めたり、整理したりする機会として重要な役割をもっています。生徒全員に平等に表現する機会が与えられるので、自分の考えをもつきっかけとなります。また、書くことで自分の考えを整理することにもなり、自分の考えを客観的に見つめることにもなります。ただし、書く活動には時間が必要です。そのため、他の学習活動とのバランスをとる必要があります。授業のどのような場面で書くことが有効なのかを見極め、意図をもって取り入れることが大切です。書く活動が、評価を行うためだけににならないよう留意します。

Break Time 2 一生徒が「自分との関わりで考える」学習活動にするために一

これまでの道徳の時間の課題として、読み物教材の登場人物への心情理解のみに終始する指導が指摘されてきました。読み物教材等を活用し、その登場人物の気持ちに共感させながら、ねらいとする道徳的価値に迫る指導方法が、いつの間にか主人公の気持ちに共感させることが中心になり、国語の読解的な指導に終始してしまうことが指摘されたのです。道徳科の授業で求められていることは、登場人物の気持ちを考えるのではなく、登場人物に自分を重ね、他人事ではなく自分事として生き方を考えることです。

自分との関わりで考えるために、「あなただったらどう考えますか。」という発問の仕方があります。このような発問は、自分との関わりで考えさせるためによく取り入れられます。しかし、教材や場面によっては、生徒が周囲の目が気になり、正しいと思われるようなことだけを言うという傾向があるので、配慮が必要です。人間理解なしに価値理解だけの授業にならないように気を付けなければなりません。このような、人間の弱さや醜さ、至らなさについて共有したい場合は、登場人物を介した発問(「この時、主人公はどのようなことを考えたのだろう」など)をして考えさせた方が、生徒は素直に弱さを伝えやすくなります。

大切なことは、生徒が「自分との関わりの中で考える」とはどのようなことなのかを考え、指導方法を工夫していくことです。右表は、その一例です。

教育活動全体で、内容項目に関わる学習をしたときには、自分事として考えられるように言葉掛けをすることも大切な。

「自分との関わり」の中で考えを深めている例	
・教材の登場人物に自分を置き換えて考える	など
・教材の問題点等を自分事として受け止めて考える	
・日常生活や学校生活等を想起しながら考える	
・自分の生活を見つめ、振り返りながら考える	
・自分だったらどうするかを考える	

【浅見哲也著「こだわりの道徳授業レシピ」を基に作成】

(3)導入と終末で行う学習活動を考えます。

「導入」とは

主題に対する生徒の興味や関心を高め、学習への意欲を喚起して、生徒一人一人のねらいの根底にある道徳的価値や人間としての生き方についての自覚に向けて動機付けを図る段階です。

導入(例)

導入は、職場体験のときの写真を見せよう。そして、生徒が実際に働いたときのことを思い起こし、主題に対する興味・関心が高まるようにしよう。

「終末」とは

ねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり、道徳的価値を実現することのよさや難しさなどを確認して、今後の自己の成長につなげたりする段階です。

終末(例)

終末は、説話を取り入れよう。授業者が仕事を続けてきた中で味わった挫折や乗り越えてきたことなど、体験談を話して思いを深めよう。



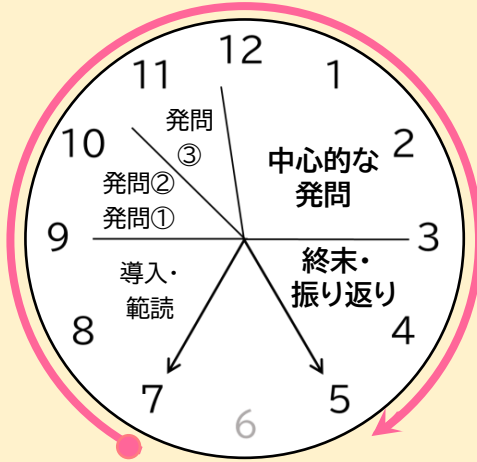
3. 時間配分 ●時間配分を決めます。

「時間配分」について

生徒が道徳科の授業で主体的に道徳性を養うためにも、授業のねらいに迫る段階に時間を掛け、より深く道徳的価値について考えることができるように時間配分をします。

右の図は、視覚的に授業の進行状況を把握しやすいように、時計の形で50分の時間配分を例として示しています。

ここで大切にしたいことは、生徒が自己を見つめ直し、人間としての生き方について考えを深める時間を十分に確保することです。



【参考:浅見哲也著「道徳科 授業構想グランドデザイン」】

Break Time 3 一「道徳性」と「道徳的諸価値」について一

「道徳性」といっても様々な捉え方があります。そこで、学校教育においては以下の表の4つを「道徳性を構成する諸様相」としています。これは、どれが最も大切といった序列はありませんし、養われる順番も決まっていません。

道徳性を構成する諸様相	
道徳的判断力	それぞれの場面で善悪を判断する能力
道徳的心情	道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪を憎む感情
道徳的实践意欲	道徳的判断力や道徳的心情を基盤とし、道徳的価値を実現しようとする意志の働き
道徳的態度	道徳的判断力や道徳的心情に裏付けられた具体的な道徳的行為への身構え

「道徳的諸価値」とは、よりよく生きるために必要とされるもので、人間としての在り方や生き方の礎となるものです。この、「道徳的諸価値」を分かりやすく整理しているものが、「内容項目」です。中学校では22の内容項目があり、「道徳性」を養うための手掛かりとなります。この内容項目に含まれる道徳的諸価値を手掛かりとしながら、道徳科の授業で「道徳性を構成する諸様相」を育てることを目標としています。



【浅見哲也著「道徳科 授業構想グランドデザイン」を基に作成】